

機関番号：14301

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20700576

研究課題名 (和文) 明清時代における生活空間の研究—家具とその使用を中心として

研究課題名 (英文) Study on the living space in Ming-Qing period
— Particularly on furniture and its use

研究代表者

高井 たかね (TAKANE TAKAI)

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：80378885

研究成果の概要 (和文)：現代でも儀礼や宴席などで重要な役割を果たす八仙卓という方卓について、その名が遅くとも明の弘治年間初めには江南地方で使われていたのを確認できた。また『金瓶梅詞話』にみえる寝台のうち、拔歩牀、歛門牀、廠（敵）庁牀、有欄杆的牀、涼牀、暖牀、暖閣牀について、その形状、出現時期等を明らかにし、さらに家具史研究における重要資料である『金瓶梅』に対して、研究資料として用いる上での限界をも指摘することができた。

研究成果の概要 (英文)：About the square table called the eight immortals table (baxianzhuo) which played an important part at various situations including ceremonies and banquets even in the modern age, it has confirmed that, at the latest, the name was used in Jiangnan at the beginning in the Hongzhi period of the Ming Dynasty. In addition, about babuchuang (canopy bed with an antechamber), huanmen chuang (bed with a 'welcoming gate'), changting chuang (bed like a spacious and open hall), you langan de chuang (bed with a balustrade), liangchuang (cool bed), nuanchuang (warm bed), nuange chuang (bed like a warm room) of beds in *Jing ping mei cihua*, I found out their shapes, appearance time, etc., and was able to point out a limit on using this novel as research source for studies on the history of Chinese furniture.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：中国家具史

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：住生活、家具史、生活空間、中国

1. 研究開始当初の背景

明代後期以降の家具については伝世品が残っていることから、その造形に対する研究は従来もおこなわれてきた。グスタフ・エッ

ケ (Gustav Ecke)、楊耀などによる初期的な研究成果、また王世襄による明式家具の研究書などがあり、家具を構造から分類し、その変遷についても言及したグスタフ・エッケの

研究、また王世襄による歴史、装飾、技術等の各方面からの総合的研究などは、中国家具の理解に欠かせない重要な研究成果であるといえる。近年は美術工芸品として古典家具への関心が高まっていることもあって、中国、欧米ともに多くの図録が出版されているため、明清家具の造形については比較的容易に知ることができる。また、中国家具の歴史の変遷を概説したものには、代表的なものに崔詠雪、胡徳生、胡文彦らによるものが挙げられ、坐式の変化にともなう家具の高度、種類の変化を中心に紹介されている。

しかしながら、家具とは本質的には人間の生活空間を構成する道具であり、その配置や使用についても、それをを用いる社会の文化と密接に関わっている。中国の生活空間にみられる秩序やそれに対する思想などを明らかにし、建築史など密接に関係する分野の成果とあわせ、生活空間に関する歴史を総合的に理解するためには、家具の使用に関する研究もきわめて重要である。

家具の使用様式を対象とした研究には、各種文献より室内配置に関する記述を集めた朱家潛による『明清室内陳設』といった先駆的成果があるものの、この種の先行研究は極端に乏しく、初歩的段階に留まっているといわなければならない。中国の生活空間の特質、あるいは各時代の特質を考えるためには、史料の収集や検討があまりに不足しており、また地域や社会的階層における差異など、考慮すべき問題も多く残されたままになっているのである。

代表者は、平成17年度より19年度まで、「小説類と挿図版画による明清家具とその使用様式の研究」(若手研究(B))と題して、『金瓶梅』を主とする文学作品とその挿図のなかから住生活関連の記述と挿図を収集し、家具とその使用に関する史料を蓄積する作業をおこなってきた。『金瓶梅』に関しては、ほかの文献史料にはあまりみられない日常の生活習俗についても詳細に描写されていることはよく知られており、家具に関しても名称、しつらえ方など比較的詳細な記述がみられる。また文学作品の挿図である版画は、明末以降の出版にかかるものの数量の多さ、さらには両者が合致するかしないかは別として、対応する文章との照らしあわせが可能であるという点において、たいへん大きな可能性を帯びた史料であると思われるが、これまでこの分野では、多くの場合、挿図をその本文とは切り離し単体で利用してきたことから、両者を相互に参照して総合的に解釈することにより、当時の家具使用の諸相を明ら

かにするための研究を継続している。

これまでの作業によって、明清時代の生活空間に関して文献、絵画ともに史料、知見が一定程度蓄積された。しかしながら、『金瓶梅』を中心として史料を収集したことから、民間の邸宅における住生活の史料が多数を占め、たとえば宮殿、庭園、寺廟での家具使用や生活文化についての史料はさらなる収集が必要である。邸宅と宮殿、庭園、寺廟など、さまざまな場所での家具使用の様相を明らかにし、それぞれを比較検討してその異同を知ることは、明清時代の生活空間を総合的に理解する上でやはり欠かせない作業である。また、地域差や階層差など、さらなる史料の蓄積や検討の必要な課題も少なくない。

2. 研究の目的

本研究は、文献・画像史料から生活空間および家具の使用に関わるものを収集して整理、蓄積し、これにより得られた知見に基づいてさまざまな場面での家具使用について考察しようとするものである。この作業を積み重ねることによって、明清時代における家具とその使用・配置の様相を明らかにし、最終的には日常あるいは儀礼等の生活空間の特質、およびその歴史を理解することにつながる。具体的な研究対象としては、宮殿、住居、寺廟また庭園などの室内空間も含み、これらの場所にみられる家具やその配置、またそれに対する意識や規範などを探ることとする。

代表者の前課題において得られた史料、知見を基礎とし、史料収集の対象を小説類以外にも拡大することで、宮殿、庭園、寺廟など、さまざまな場所での家具使用の様相を明らかにし、また比較検討をおこない、建築史など関連分野における成果とあわせ、より総合的に明清時代の生活空間の理解につながる研究への発展を試みる。

また、これまでの作業で蓄積された史料は、最終的には明清生活空間史の史料集、データベースとして当該および関連分野の研究のために供したいと考えているが、そのためにはさらなる史料の充実や整理が必要である。従来家具の種類、設置される部屋の機能、場面などの項目をたてて文献・絵画史料の分類、整理をおこなってきたが、特に絵画史料に関しては、一つの画面に多くの要素が盛り込まれていることが多く、繰り返し検討が必要である。本研究でもこれらの作業を継続し、内容の充実と向上をはかりたい。

家具やその使用に関する研究は、家具史はもとより、他分野の研究者にとっても直接的

または間接的に益するところが大きいと確信している。本研究と密接に関連する建築史や美術工芸史、造園史といった分野は当然のこととして、「人が如何に生活してきたか」という問題は、東洋史、考古学、民俗学、都市史などの研究分野にとっても本来関わらざるを得ないものである。特に上記の明清生活空間史史料集は、様々な研究領域にも大いに寄与するものだと考える。

3. 研究の方法

本研究では、大きく分類して次の四種の作業をおこなった。

(1) 文献・画像史料の収集

① 家具史、および生活空間史に関連する書籍の購入。

② 京都大学各図書館をはじめ、国立公文書館、国立国会図書館、東洋文庫、東京大学内各図書館等において、家具史、生活空間史に関する文献調査。

③ 漢籍史料より、家具史および住生活史に関連する記述の抽出。史料収集の対象を、前課題の小説類を中心としたものから、それ以外の文献にも拡大した。

④ 絵画や文学作品の挿図版画を中心に、家具や建造物など住生活空間が描かれた画像史料を収集。

文献・画像史料の収集に関しては、研究代表者が所属する京都大学人文科学研究所は、漢籍をはじめ、中国学研究に必要な資料を豊富に所蔵する機関であり、また同大学内の文学部図書館、附属図書館の資料も容易に利用できる点から、この作業の遂行に有利な条件に恵まれた。

(2) 文献・画像史料の整理、電子化

将来的な生活空間史史料集の編纂、公開を考慮して、前項において収集した文献・画像史料を、項目をたてて分類、整理、さらに史料の電子化をおこなった。

(3) 史料の検討

① 家具とその使用方法、および生活空間に関連する文献の記述を比較検討した。

② 絵画史料の解釈、検討。

③ 挿図をそれに対応する記述部分とあわ

せて総合的に解釈する作業。この作業によって、記述された内容からみて、家具や建築など住空間の様子がどの程度正確に描かれているか、また何が描かれていないかなど記述内容と相違する点に留意して考察を加え、挿図版画における家具をはじめとした生活空間の描かれ方をも検討した。

また、この作業で得られた知見は、上述の史料分類・整理にも有益であった。

(4) 現地調査

以上三種の作業に加え、現代に引き継がれた伝統的生活習俗を観察することによって文献や挿図による研究を補完し、さらに研究の精度向上させることを目的として、中国における現地調査をおこなった。

調査地は、明清建築や家具が比較的よい状態で残っている山西省とし、太原市、大同市、朔州市、晋中市にて古家具と伝統的住生活に関する調査をおこなった。調査期間は2008年8月24日～31日。

4. 研究成果

主な研究成果は以下のとおり。

(1) 現代中国でも儀礼や宴席などで重要な役割を果たす八仙卓という方卓について、その名が遅くとも明の弘治年間初めには江南地方で使われていたことを確認した。また、これは明代でも宴飲に使用される卓であり、現代での使用場面のように特別あらたまった席で使うのではないが、日常的な飲食ではなく客人と同席する時か家庭内の特別な行事に使用された。ある程度の礼節を求められる席では、これを使うことで一定の格式を表し最低限の礼節を保ったとみられる。

(2) 『金瓶梅詞話』にみえる牀類のうち、臥具として使用される拔歩牀、欵門牀、廠(廠)庁牀、有欄杆的牀、涼牀、暖牀、暖閣牀について名物学的方面から考察した結果、以下のことがわかった。

① このうち牀前に小廊を持つ形式の拔歩牀は、文献、実物資料等を検討した結果、明、嘉靖以前の存在は確認できない。

② 欵門牀は、牀の入口上部を仏殿門窓様式と同様に花頭型にしたものである。従来言われていたような、酒店などの店先に設けられる装飾門に類似するものではない。

③ 廠庁牀、暖閣牀は他の文献上に用例がみ

えず、いずれも部屋の名称を冠して『詞話』作者が独自に創作した可能性がある。『金瓶梅』は現実社会の習俗を比較的忠実に投影しているといわれるが、当然ながらそこにみえる家具が全て現実を写したものとはいえず、これはその一例である。このことは『金瓶梅』を史料として利用するにあたり、あくまでフィクションであることを念頭において、一々検証を加える必要があることをあらためて示しており、家具史研究における重要資料であるこの著作の、研究資料としての限界をも指摘することができた。

そのほか、挿図版画を対応する記述と合わせて解釈する作業によって、住空間の描かれ方についても一定の傾向が明らかになりつつある。これについてはさらに精査を加え、あらためて成果を公表したい。

なお、本研究で集積した資料は、将来的に明清生活空間史資料集として関連諸分野研究のために供したいと考え、引き続きデータを増補し、これまで集めた資料も校正、整理して後の公開に備える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 高井たかね、『金瓶梅詞話』牀類小考、佛教藝術、査読有、316号、2011、75-113
- ② 高井たかね、明代の八仙卓について—その出現時期および用途を中心に—、家具道具室内史、査読無、3号、2011、140-141

〔学会発表〕(計2件)

- ① 高井たかね、明代の八仙卓について—その出現時期および用途を中心に—、家具道具室内史学会2010年度大会、2010年5月16日、学習院大学文学部棟北2号館10階会議室(東京都)
- ② 高井たかね、『金瓶梅詞話』中の牀榻類について、京都大学人文科学研究所共同研究班「伝統中国の生活空間」研究会、2009年10月27日、京都大学人文科学研究所分館応接室(京都府)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高井 たかね (TAKANE TAKAI)
京都大学・人文科学研究所・助教
研究者番号：80378885

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし